

令和6年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月17日実施)	総合評価 (3月25日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	<ul style="list-style-type: none"> 文理融合の教育課程を編成し、全ての教科で生徒の総合知を醸成する探究的かつ教科横断的な学びを充実させる。 課題研究活動や体験講座を中心に、科学的思考力や多面的多角的な思考力、優れた洞察力・判断力や表現力を育成する。 	<ol style="list-style-type: none"> 文系理系にとらわれない総合知を身に付けるために、教科横断的な内容を取り入れた組織的な授業改善を目指す。 課題研究活動を軸に、理数探究基礎や総合的な探究の時間を組み立て、生徒にクリティカルシンキングを基盤とした、「総合知」を活用できる力を育成する指導法を組織的に研究し、来年度のSSH認定を目指す。 	<ol style="list-style-type: none"> 教員間の相互の学び合いを通して授業力を高めるとともに、授業改善策の検討を行い、授業改善に向けた工夫を共有する機会を設定する。 先進的な科学分野に触れ、社会課題を多面的に捉える力を育成するため外部と連携した取組を進めるとともに、課題研究において、生徒の科学的思考がより深まる指導法について研究し、共有を図る。また、グローバル教育の活動を通じ、生徒の多面的多角的な視点と思考を育成する。 	<ol style="list-style-type: none"> 教員間で他者の授業を見学する期間を設けて、期間中に少なくとも1回は授業を見学し、改善に向けた工夫を共有する場を設定する。 外部と連携した取組みが3回以上実施できたか。 <ul style="list-style-type: none"> 課題研究に係る教員研修会や指導研究会を年間3回以上実施できたか。 姉妹校交流や海外研修旅行を有意義な取組みとして実行し、その成果を共有できたか。 	<ol style="list-style-type: none"> 授業評価アンケートをもとに、教科会議を実施し、授業改善案として全教職員で共有した。 <ul style="list-style-type: none"> 10月中旬から11月下旬に自教科に関わらず授業を見学する期間を設けた。 10月18日に公開研究授業を実施した。 1学年対象の理数教育講演会や、2学年対象のサイエンスカフェを実施し、先進的な科学分野に触れる機会を設けた。 <ul style="list-style-type: none"> 2学年課題研究において日本大学生物資源科学部の大学院生による助言を受け、課題研究発表会を3月14日に行った。 教員対象のSSH研修会を3回実施した。 SSH申請書を文理融合基礎枠で提出した。 10月に米国ナッシュビル市使節団、12月に豪姉妹校を受け入れ、国際交流委員会を中心に交流をした。3月末にはニュージーランド海外研修旅行を実施した。 	<ol style="list-style-type: none"> 今年度の授業改善の取組において、第2回授業評価アンケートで年度当初に掲げた目標がどの程度達成されたかを見取り、来年度の計画につなげる。 <ul style="list-style-type: none"> 授業改善を継続するために、来年度の授業評価実施後も教科会を設ける。 公開研究授業後の研究協議での意見を全職員に還元し、今後の授業に生かす。 SSHの申請内容の取組を実施していく。 <ul style="list-style-type: none"> 1学年の理数探究基礎における鎌倉市の外部機関との連携や2学年課題研究での大学からの指導・助言の取組を引き続き行っていく。 国際交流の取組をポスターや研修誌にまとめるとともに、校内での報告会を行い、次年度以降に引き継ぐ。 	<ul style="list-style-type: none"> 全教職員が授業を見学したことは評価できる。業務量とのバランスをとりつつ、次年度も取り組んでほしい。 授業評価アンケートで、否定的に回答した生徒への指導について考え、次年度に実施していくとよい。 授業評価アンケートの項目6について、教員が活動の場面を設定できたことは評価する。生徒の肯定的な回答数は多くなかったことについて、指導を積み重ね、3年間で向上するよう考えるとよい。 SSHの方針を取り入れて活用してほしい。 	<ol style="list-style-type: none"> 第1回授業評価アンケートをもとに教科ごとの工夫や取組をまとめ分析し、授業改善案として全教職員で共有した。また、教員間で他者の授業を少なくとも1回は見学する機会を設けた。 文理融合基礎枠としてのSSH指定での研究開発テーマ「科学的思考力を備え多様な知識や情報を統合して総合知を活用する科学技術人材を育成する研究」にふさわしい取組をすることが必要となる。 <ul style="list-style-type: none"> 授業における「総合知」、「文理融合」の視点を入れた取組の継続、2学年の課題研究活動の充実などが課題である。 	<ol style="list-style-type: none"> 授業の中で、生徒が自分の考えをまとめたリ、課題の解決方法について考えたりする場面をより多く設定するとともに、指導方法についての工夫を教職員で共有する。 <ul style="list-style-type: none"> 授業に関する教員間のコミュニケーションを深めていくために、教材の共有化を行い、生徒の資質や能力の向上を実現できる手法を取り入れていくことが必要となる。 課題探究活動においては、教員の指導力向上と生徒の取組の充実につながるような評価方法の開発が必要となる。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> 他者を思いやることのできる人間性、主体的な態度を育成する。 学校行事、部活動と学習のバランスの取れた学校生活の支援体制を充実させる。 人権を尊重しつつ、自らの知と徳を培い生きる力をはぐくむ。 	<ol style="list-style-type: none"> 学校行事に対して生徒が主体的に立案・実施・検証することによって、実践性・自主性・協調性を養い自己肯定感を高められる場面を創出する工夫をする。 自他の生命と人権の尊さを認識し、それに伴う倫理と知識を育む指導を行う。 	<ol style="list-style-type: none"> 生徒が自己の役割を認識し、創造性を伸ばす取組ができるよう、生徒会執行部の活動、学校行事の運営、部活動における継続的な支援を行う。 教育相談体制を整備し、生徒の情報を職員全体で共有し、適切な指導・支援を実践する。必要に応じて外部とも連携をとる。 <ul style="list-style-type: none"> 登下校も含めた学校生活のトラブル、SNS関連等のトラブルに対して適切に対応する。 	<ol style="list-style-type: none"> 事後アンケートにおいて、生徒の主体性や創造性に関する肯定的な回答した生徒が3分の2を超えたか。 <ul style="list-style-type: none"> 行事の計画・実施・振り返りを通して、計画的かつ継続的な支援をすることができたか。 SC・SSWや外部などの連携も考慮し、会議(学年・コア・ケースなど)等で具体的な支援策を立て、実践することができたか。 <ul style="list-style-type: none"> トラブルや苦情に対し、改善に向けて行動できたか。 	<ol style="list-style-type: none"> 鎌高祭、スポーツ大会、球技大会、合唱コンクールにおける終了後の全校アンケートで、ほぼ全ての行事において8割以上の生徒が「主体的に参加することができた」と回答した。実行委員の生徒たちを中心に学校全体で主体生や意欲を高めることができたと考えられる。 学校全体に教育相談体制が浸透し、教職員だけでなく生徒・保護者のSC・SSWの活用機会が増えた。 <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて外部機関と連絡を取り、連携を取りながら継続的な支援を行った。 	<ol style="list-style-type: none"> 引き続き、学校行事において、生徒が主体的に取り組む、運営することができるよう、来年度に向けた継続的な指導を行っていく必要がある。 SC・SSWの活用が増える一方で、その業務量が増加した。「かながわ子どもサポートドック」を含め、さらなる体制の整備が必要である。 <ul style="list-style-type: none"> 今年度SNS関連のトラブルがあったことから、掲示等で事あるごとに注意喚起を促すことが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> かながわ子どもサポートドック2年目となり、学校全体で取り組み、成果があったことは評価できる。 小・中学校では、不登校の児童・生徒への支援が学校外にもある。高校は校外に求める場が少ないことを懸念している。 	<ol style="list-style-type: none"> すべての学校行事において、生徒によるアンケート結果は、8割以上が肯定的な回答であったので、主体性・自己肯定感を高めることができた。 SC・SSWが週1回来校し支援の機会が増えたことが、生徒・保護者にも周知され、カウンセリングを希望する者が多くなった。 <ul style="list-style-type: none"> SNS使用のルールについては機会あるごとに注意喚起を行ったが、SNSの安易な利用による指導事例があった。 	<ol style="list-style-type: none"> 来年度も、生徒が主体的かつ創造的に学校行事に取り組む運営できるように、生徒会執行部や実行委員会への指導を組織的かつ継続的に行っていく。 かながわ子どもサポートドックは支援を必要とする生徒の掘り起こしに一定の効果があった。得られたデータを速やかに活用していくことが今後の課題である。 <ul style="list-style-type: none"> SNSを適切かつ安全に活用していくよう、今後も指導が必要である。

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月17日実施)	総合評価(3月25日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人ひとりのキャリア形成に則した支援体制を整備する。 難関国公立大学、難関私立大学への合格者数を増加させる。 	<ol style="list-style-type: none"> 新課程入試となる3年生に向けた新たな情報を大学入試研究会等で収集し、職員・生徒・保護者に遺漏なく伝える。また大学に関する情報に加え職業観の醸成にも努める。 一般選抜で大学進学をする者が果敢に挑戦出来るよう、進路指導を行う。また学校推薦型選抜や総合型選抜を活用する生徒保護者共に適切に情報提供をする。 	<ol style="list-style-type: none"> 職員対象に新課程入試となる共通テストの説明会を実施する。大学入試研究会への参加を職員にも周知し参加を呼び掛ける。 卒業生のうち社会人として活躍している方のお話を『学習・キャリアワークブック』に掲載する。 保護者対象の説明会や生徒対象の進路集会を実施し、情報を周知する。 「第一志望を貫く」指導を組織的に行い、学年会でも複数回説明し方針を徹底する。 	<ol style="list-style-type: none"> 職員対象の説明会を複数回実施できたか。進路指導資料を作成し、全職員に提示できたか。 社会人の原稿を『学習・キャリアワークブック』に複数掲載できたか。 多様な情報を指導に生かすことで、スーパーグローバル大学(トップ型)への現役進学率が前年を超えたか。 	<ol style="list-style-type: none"> 大学入学共通テストの変更点や生徒に対して説明する際の留意点を職員全体に周知する研修を実施した。 『学習・キャリアワークブック』に社会人として活躍する卒業生の話を掲載した。 保護者を対象とした進路説明会を開催し、生徒と同様に新課程入試の内容や変更点を周知した。 「第一志望を貫く指導」を3学年担任団と共有し、指導した。 	<ol style="list-style-type: none"> 大学入学共通テストにおける変更の大きい地歴・公民の受験科目について理解が深まるよう基本部分から説明する。 指定校推薦会議において第一志望を貫く生徒が過去3か年で最も増加した。総合型選抜や公募制の学校推薦型選抜の要項の読解が難解なため支援を継続する。 毎年発生する大学入試の変更点や確実に生徒に伝わるよう、『第一志望宣言』も活用しながら生徒に周知する。 	<p>○第1志望を貫くために様々な手立てを講じており評価できる。今年度の分析を次年度に生かしてほしい。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 大学名変更や入試方法の変更を生徒、職員、保護者共に示すことができた。また、大学卒業後のキャリア形成についても一定の内容を示すことが出来た。大学での研究内容なども生徒に示すことで大学選択の際、活用することができるので、今後の課題とした。 現役生の難関10大学合格人数は2年連続5名、国公立大学合格人数は4年連続30名以上を達成している。今後も成果の継続および増加を目指したい。 	<ol style="list-style-type: none"> 来年度は大学入学共通テストもオンライン出願となるので、適切な指導体制を作る。 難関大説明会を実施し、情報提供に努める。
4	地域等との協働	<ul style="list-style-type: none"> 関連する諸機関、団体との連携を進め、協働に取り組むことをとおして、地域に信頼される学校づくりを行う。 	<ol style="list-style-type: none"> PTAや藤沢支援学校鎌倉分教室との連携を図り、学校行事において交流を図るだけでなく、相互の教育活動が連動的で互恵的となるような教育活動を推進する。 学校外の機関・団体等との連携を図る。 	<ol style="list-style-type: none"> PTAや分教室と日頃から情報交換を行い、本校生徒との交流・理解が深まり互いに良い関係を築くことができるよう機会を作る。 生徒が地域等学校外の機関に協力したり、学校外の機関等の力を本校の教育に生かす機会を設ける。 	<ol style="list-style-type: none"> PTA活動との連携を密にし、生徒の主体的な地域貢献活動が増えたり、分教室との交流を活性化することができたか。 生徒が地域等に協力するとともに、自分たちの学習成果を知ってもらう機会を設けることができたか。 	<ol style="list-style-type: none"> スポーツ大会でのドリンクサービスや鎌高祭での巡回など、学校行事全般においてPTAと連携し、柔軟な協力体制を構築した。 藤沢支援学校鎌倉分教室とは、対面式、鎌高祭、合唱コンクールにおいて交流を深めた。 行事の予定計画を中心に、日頃からPTAや分教室の職員と情報交換した。 部活動において、地域の施設で吹奏楽部や室内楽部が演奏を行い、地域に貢献することができた。 	<ol style="list-style-type: none"> 引き続き、PTAや分教室の職員と情報交換を行っていく。 藤沢支援学校分教室の交流の機会を維持しながら生徒同士の交流の機会を積極的につくり、次年度につなげていく。 PTAとの積極的な連携を継続していく。 来年度の行事实施を見据えて、生徒が地域と交流する機会を設ける。 	<p>○今年度は地区交通安全大会においてPTAと生徒の合同で発表した。次年度もPTAと生徒の交流の場を持つことを期待する。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 学校行事全般においてPTA及び藤沢支援学校分教室と連携を深めることができた。分教室との交流については、対面式、鎌高祭において合同実施し、交流を深め、連携を深めることができた。 部活動において、地域の施設で吹奏楽部や室内楽部が演奏を行い、地域に貢献することができた。 	<ol style="list-style-type: none"> 来年度もPTAおよび藤沢支援学校分教室の生徒との連携を深めていく。特に、PTAと生徒の交流の機会を模索していく。 生徒が地域等に協力するとともに、学校の教育活動や生徒の学習成果を発信する機会を増やしていく。
5	学校管理 学校運営	<ul style="list-style-type: none"> 校内組織をより活性化し、全職員の情報共有や運営参画を進める。 施設・設備の維持や管理を適切に行い、生徒の安全と教育成果の拡充を図る。 	<ol style="list-style-type: none"> 職場の目標や課題を全職員で適切に情報共有し、個々の役割を理解し、主体的・協働的に業務に参画する。 生徒・職員が災害時に適切な判断と行動ができる、災害に対する意識の高い学校づくりを行う。 	<ol style="list-style-type: none"> 職員間の円滑な情報共有、業務の生産性の向上、働き方改革の推進のため、ICT機器を効果的に活用する。 実践的な避難訓練、防災訓練、DIG訓練等を実施し全職員・生徒の防災に対する実践力を高める指導に取り組む。 	<ol style="list-style-type: none"> ICT機器の効果的な活用により、業務を適切に効率化し、職員の時間外勤務を減らすことができたか。 生徒・職員が具体的な災害に対する意識を高める訓練等を実施できたか。 	<ol style="list-style-type: none"> 勤務申請簿(紙)、施設予約簿(紙)を廃止し、Teamsを活用することとした。 5月にシェイクアウトと防災訓練を行い、8月にシェイクアウトとDIG研修、生徒・職員双方による防災下校班の確認を行い災害に対する意識を高めた。 	<ol style="list-style-type: none"> 意見の収集や情報共有等、ICTを活用して、業務の効率化を推進できるよう工夫する。 来年度も引き続き災害の発生を想定し、具体的な場面を想定できるような防災訓練を実施する。 	<p>○修学支援金制度の所得制限撤廃により、公立学校は厳しい状況になると予想される。計画的に施設の充実を図ってほしい。</p> <p>○防災に関して、地域の中・高等学校への期待がある。実践的な防災訓練等において、鎌倉高校と近隣住民とが連携できるとよい。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 勤務申請簿(紙)、施設予約簿(紙)を廃止し、Teamsを活用することとした。 年間を通し、2回シェイクアウトと避難訓練を行い、DIG研修、教員対象の消火訓練を各1回ずつ行った。生徒・教員ともに防災意識を高めることができた。 	<ol style="list-style-type: none"> 意見の収集や情報共有等、ICTを活用して、業務の効率化を一層推進できるよう工夫する。 地域の避難場所に指定されていることを踏まえた防災計画を策定するとともに、より実態に即した防災訓練を行えるようにする。